

# 湯気の向こうに

静けさが支配する食卓だった。食卓を囲んでいるのは九名のおじさん達で、並んでいるメニューは赤飯・鯛塩焼き・だし巻き・煮物と言った、祝いの膳と呼称した方がふさわしい食卓である。これが日本だと「無口な人達の膳」でくくられるだろう。しかし会話もなく食事をしている場所が、平均気温マイナス五七度、記録最低気温マイナス七九・八度、海拔三八〇メートル、南極の内陸約一〇〇キロに位置する「ドーム基地」となったら事態は一気にドラマティックになっていく。

南極観測船「しらせ」では、南極大陸に向けて出港した夕食に赤飯弁当が供食される。それが日本では最後の食事と言うことで、観測隊諸氏は大事にゆつくりと食べていた。調理担当の自分はそのことを思いだし、迎える「しらせ」が晴海埠頭を出港したちょうど二年後の二月二四日に、このメニューを再現したわけである。細菌はおろかウイルスさえも生存できないすさまじい環境で、九名の隊員達は、黙々と観測及び維持活動に従事していた。日中はそれぞれの活動をしているから、顔を合わせることもまれで、それが一堂に会する夕食は一日を締めくくると大切な行事でもあった。その時間に一年前に食べたメニューが出てくるのである。

## 西村 淳

プロフィール  
1952年北海道生まれ。海上保安庁在任中に、第30次南極観測隊、第38次南極観測隊に調理担当として参加。その経歴をもとに、エッセイ『面白南極料理人』シリーズ（新潮文庫）を執筆。2009年に沖田修一監督により映画化。巡視船（へんくう）の教官として後輩を教育したあと、北海道へ戻り、食をとおしてさまざまなコミュニケーションを図る「オーロラキッチン」を設立。執筆業に加え、講演会、メディア出演、フードプロデュースなど多方面で活躍中。

自分の考えた絵図は、一同登場↓再現メニュー↓越冬の終わりを実感↓歓喜↓「西村君さすが！ 気配りの人！ しらせの再現弁当とは嬉しいなあ！」 ↓乾杯↓大騒ぎとなるはずだった。それが咀嚼音しか聞こえない食卓である。正直戸惑ってしまった。

「なんと情緒の無い連中だ。他人の真心に気がつかないなんて」心の中でブツブツ言いながら海老の吸い物を口に入れた時、それは起きた。湯気の向こうに家族が現れたのである。正確に言ううと一年前のメニューを口に含んだ瞬間、意識は二万五〇〇〇キロを飛翔し、我が心に晴海埠頭で手を折れんがばかり見送ってくれた妻が娘が家族達が、まざまざと投影された。他の隊員達とは見ると、彼らの意識も食べているであろうこの場所が、南極大陸の奥地「ドーム基地」ではなかった。それぞれの隊員の魂とか意識はすでに浮揚し、大切な人達の所に帰ってしまったことが本当に実感できた。それが先述した咀嚼音が支配する、静かな食卓につながっていったと思われる。

食事のメニューで魂が既視感を起こしたのか今となつては不明だが、場所は共有しているのに意識は別々と言う、食卓の湯気の向こうで起きた、不思議な不思議な出来事だった。

## 月刊 みんな

10月号日次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>湯気の向こうに<br/>西村 淳</p> <p><b>特集 混住</b></p> <p>2 コンタクト・ゾーンとしてのシェアハウス<br/>田中 雅一</p> <p>4 シェアされる心地よさ——英国のシェア居住<br/>成定 洋子</p> <p>5 海の上の研究室<br/>大森 裕子</p> <p>7 困龍屋での混住生活<br/>河合 洋尚</p> <p>8 東日本大震災の避難所が教えてくれるもの<br/>竹沢 尚一郎</p> <p>10 集めてみました世界の〇〇<br/>まくら編<br/>丹羽 典生</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 味の根っこ<br/>アドボ<br/>永田 貴聖</p> <p>16 文化遺産おもてうら<br/>「食」の文化遺産<br/>——和食とキムジャン<br/>朝倉 敏夫</p> <p>18 音の居場所<br/>震災と音楽<br/>中村 美亜</p> <p>20 人間学のキーワード<br/>フード・セキュリティ<br/>栗本 英世</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|